

平成 29 年度 全国私立中学高等学校
私立学校特別研修会
外国語（英語）教育改革特別部会
【西日本エリア（広島）】
実施報告

小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成 26 年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外部専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象としているものの、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていたことから、私学関係者の要望に応じて、文部科学省は平成 27 年度より私立学校教員が参加しやすいよう受入体制を整備し、私立学校教員も参加できるようになりました。

しかし同時に、次期学習指導要領や大学入学者選抜改革を含めて国が進める英語教育改革に係る最新の情報が、私立学校には十分に伝わっていない実情もあり、私立学校教員は公立学校教員に比べ情報量が少ない故に埒外に置かれた感はありません。

ついでに、私立学校においても、外国語(英語)教員の外国語(英語)力・指導力強化を図るためには、教員が 21 世紀型教育に相応しい最新の教授法と情報を早急に取り入れる必要があることから、当研究所では、平成 27 年度より専門家の指導による特別研修「外国語(英語)教育改革特別部会」を実施しており、平成 29 年度も引き続き、専門家の指導に上記の「英語教育推進リーダー中央研修」受講者の指導によるワークショップを加えて、研修を実施することとしました。

当部会【西日本エリア(広島)】では、初日は広島女学院中学高等学校を会場に、英語の授業等の視察、視察校の教員を交えて意見交換等を行います。同校は 2014 年より「SGH(スーパーグローバルハイスクール)」に指定されており、未来のグローバル・リーダーの育成に向け、価値観の相違を乗り越えられる「対話力」を養う進化した英語教育を実践しています。翌日は市内の広島ガーデンパレスにおいて、東京学芸大学外国語・外国文化研究講座英語科教育学分野教授・国際教育センター長の馬場哲生氏による講演、私学の新しい英語教育の中核を担うべく文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者の指導によるワークショップおよび意見交換会を行います。また、参加者の交流を深めてネットワークづくりを進める多彩なプログラムを用意しています。

- ◆ **会 期** ◆ 平成 29 年 1 月 24 日(金)～25 日(土)
- ◆ **会 場** ◆ 広島女学院中学高等学校(24日) 広島市中区上鞆町 11-32
 広島ガーデンパレス(25日) 広島市東区光町 1-15-21
- ◆ **参加人員** ◆ 36 名
- ◆ **参加対象** ◆ 私立中学高等学校の英語科教員 (ワークショップは英語で行われます。)
- ◆ **プログラム** ◆
 - ①研究授業 広島女学院中学高等学校(授業視察、『スピーチ・プレゼンテーションコンテスト』視察)
 - ②実践発表 発表者 広島女学院中学高等学校 教諭
 - ③意見交換会 授業者との意見・情報交換を通して課題を探求します。
 - ④講演 演 題「英語教育改革の中で求められる授業改善の在り方」
 講 師 馬場 哲生 東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 英語科教育学分野教授、国際教育センター長
 - ⑤ワークショップ ※ワークショップ後にグループに分かれて意見交換会を行います。
 テーマ「英語で授業のヒント Teaching English in English」
 指導 文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者
 (1) Grammar 1 (2) Grammar 2 (3) Vocabulary
- ◆ **日程概要** ◆

時刻	9 30	10	11	12	13	14	15	16	17
11月24日(金) 広島女学院 中学高等学校				受付	開 会 式	① 研究授業	② 実践発表	① 研究授業 (スピーチ・プレゼンテー ションコンテスト)	③ 意見交換会
11月25日(土) 広島ガーデン パレス		④講演	⑤ ワークショップ	昼食	⑤ ワークショップ		意見交換会	開 会 式	

◆ 日 程 表 ◆

11月24日(金)

[会場 広島女学院中学高等学校]

12:00	受 付 [高校校舎 1F]		
12:30	◇開会式	[会場 大講義室]	
	司会 川本芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長		
	1. 主催者挨拶	一般財団法人日本私学教育研究所 理事長	吉田 晋
	2. 視察校代表挨拶	広島女学院中学高等学校 校長	星野 晴夫
	3. 日程説明	広島女学院中学高等学校 教諭	野中 理恵
	4. 閉式		
	◇研究授業	※授業は変更となる場合がございますのでご了承下さい。	
	● 5 限目		
12:45		学年・クラス・授業名	授業者
12:55		高1 英語表現 I	前本日向子
		高2コミュニケーション英語 II	常本 奨悟
		中3英語特別クラス	John Weil
		中1英語	高見 知伸
		会 場	
		102教室	
		306教室	
		セミナー3	
		自習室2	
13:40	◇実践発表	[会場 大講義室]	
13:50	※広島女学院中学高等学校の英語教育についての説明の後、研究授業について各授業担当者より説明を行います。		
14:35	●スピーチ・プレゼンテーションコンテスト	[会場 ゲーンズ記念ホール]	
16:10	※高校1年生・2年生によるスピーチ・プレゼンテーションコンテストを視察します。		
16:20	◇意見交換会 (中学校、高等学校授業者との質疑応答・意見交換)	[会場 大講義室]	
	※「研究授業」「スピーチ・プレゼンテーションコンテスト」「実践発表」を受けての質疑応答を行います。		
	司 会 山 崎 吉 朗 一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員		
	指導助言 広島女学院中学高等学校教諭		
17:00	解 散		

11月25日(土)

[会場 広島ガーデンパレス]

09:30	◇講演	[会場: 2階 雅]	
	司会 外国語(英語)教育改革特別委員		
	演 題 「英語教育改革の中で求められる授業改善の在り方」		
	講 師 馬 場 哲 生 東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 英語科教育学分野教授, 国際教育センター長		
11:00	◇ワークショップ	[会場: A: 2階 雅/B: 2階 華]	
11:10	テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English」		
	● Grammar 1		
	指 導 高 橋 晶 子 八戸聖ウルスラ学院中学高等学校	教諭	
	浜 野 能 男 普連土学園中学高等学校	教頭	
	出 崎 玲 理 海星高等学校	教諭	
	藤 本 鷹 正 大分中学高等学校	教諭	
	◇昼 食 ※各ワークショップ会場		
	◇ワークショップ	[会場: 2階 雅/B: 2階 華]	
	テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English」		
	● Grammar 2 ● Vocabulary		
12:10	指 導 高 橋 晶 子 八戸聖ウルスラ学院中学高等学校	教諭	
13:00	浜 野 能 男 普連土学園中学高等学校	教頭	
	出 崎 玲 理 海星高等学校	教諭	
	藤 本 鷹 正 大分中学高等学校	教諭	
15:00	◇意見交換会	[会場: 2階 雅]	
15:10	※ワークショップに関して、講師および参加された先生方で、質疑応答を交えながら意見交換を行います。		
	◇閉会式	[会場: 2階 雅]	
15:50	司会 川本芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長		
	1. 開式		
	2. 総括 一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員	山 崎 吉 朗	
	3. 閉式		
16:00	解 散		

◆ 学校紹介 ◆

広島女学院中学高等学校 (理事長 中川 日出男/校長 星野 晴夫)

中高一貫教育の女子校。1886(明治 19)年に砂本貞吉牧師により、聖書と英語の私塾として誕生し、翌年、N.B.ゲーンズ宣教師をアメリカから招き、1890 年米国南メソジスト教会等の協力を得、現在の地に校舎を建設。当時からのキリスト教主義教育の伝統は現在も女学院を支え、創立から 131 年を経て、幼稚園・中学校・高等学校・大学・大学院をもつ総合的な学園として、多くの卒業生を輩出している。2014 年に文部科学省より SGH(スーパーグローバルハイスクール)の指定を受け、「核の惨禍のない世界を創り出す、しなやかな女性」の育成を目標に、「世界に繋がる平和観」「価値観の相違を乗り越えられる対話力」「合意を創り実践するリーダーシップ」の 3 点に重点を置いた教育を実践している。

◆ 講師プロフィール ◆

馬場 哲生 (ばば てつお)

東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 英語科教育学分野教授, 国際教育センター長。教育学修士。専門は英語教育。著書に『教科教育学シリーズ⑨ 英語科教育』(編著、一藝社)、『総合英語 One』(監修、アルク)等の他、文部科学省検定済教科書の編集委員を務めている。英語科教員養成についての多数の学会発表等、精力的に教育研究活動を行っている。

◆ 講師・発表者・指導員(順不同) ◆

馬 場 哲 生	東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座	英語科教育学分野教授, 国際教育センター長
星 野 晴 夫	広島女学院中学高等学校	校長
野 中 理 恵	広島女学院中学高等学校	教諭
高 橋 晶 子	八戸聖ウルスラ学院中学高等学校	教諭
浜 野 能 男	普連土学園中学高等学校	教頭
出 崎 玲 理	海高等学校	教諭
藤 本 鷹 正	大分中学高等学校	教諭
吉 田 晋	富士見丘中学高等学校	理事長・校長

◆ 特別委員・指導員(順不同) ◆

平 方 邦 行	工学院大学附属中学高等学校	校長
野 中 理 恵	広島女学院中学高等学校	教諭
浜 野 能 男	普連土学園中学高等学校	教頭
川 本 芳 久	一般財団法人日本私学教育研究所	事務局長
山 崎 吉 朗	一般財団法人日本私学教育研究所	主任研究員

外国語（英語）教育改革特別部会【西日本エリア（広島）】 実施概要

平成29年11月24日～25日に広島女学院中学高等学校及び広島ガーデンパレスを会場に開催。参加者36名。同校は中高一貫教育の女子校で、1886年（明治19年）に砂本貞吉により、聖書と英語の私塾として誕生した。創立から131年を経て、幼稚園・中学校・高等学校・大学・大学院をもつ総合的な学園として、多くの卒業生を輩出している。2014年に文部科学省よりSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受け、平和教育と共に高水準の英語教育を推進している。初日は広島女学院中学高等学校にて開会式の後、研究授業を見学。続いて野中理恵・同校教諭からの実践発表、研究授業を行った先生方との質疑応答の後、スピーチ・プレゼンテーションコンテストを視察し、最後に、全体で意見交換会を行った。2日目は広島ガーデンパレスにて馬場哲生・東京学芸大学外国語・外国文化研究講座英語科教育学分野教授、国際教育センター長による講演、文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」平成28年度受講者の先生方の指導による英語でのワークショップ、意見交換会が行われた。意欲溢れる参加者と熱心な講師・指導員の協力により、2日間を通して密度の濃い研修会となった。

開会式

開会にあたり山崎吉朗・当研究所主任研究員は、視察校である広島女学院中学高等学校の先生方に運営協力の感謝を述べ、次のように挨拶した。

「広島女学院はご周知の通り、古くから高水準の英語教育の実践校であり、また国際交流が盛んに行われていることでも有名である。英語教育改革と叫ばれて久しいが、具体的にどのようにすればよいのか、という点について、研究授業や実践発表、またスピーチ・プレゼンテーションの視察を通じて何かしらヒントを得ることができると思う。当部会は開始より3年目となり、文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」（以下、「リーダー研修」）の「集合研修」を受講した先生方の「研修実習」の場として実施している。文部科学省の予算の事情等で、残念ながら本事業は縮小傾向になる見込みだが、私学が取り残されぬよう、先生方には宜しくお願ひしたいと思う。」

続いて、星野晴夫・広島女学院中学高等学校長より視察校代表として、次のように挨拶があった。

「当校は、今年で創立131年を迎えるが、元々は宣教師である砂本貞吉牧師により、主に聖書と英語の授業を行う私塾として誕生した。原爆被害の後には、平和教育にも力を入れてきた。そうした取り組みを世界に向けて発信するにあたり、やはり英語は要となる。かねてより交流のあった米国・豪州に加え、近年は韓国、カンボジア、ミャンマーにも生徒を派遣し、対欧米諸国とは異なる価値観や歴史観を持つ国々との交流を図っている。そうした国々とのようにして平和観を構築したらよいか考えることは、生徒たちにとって、対話力やリーダー性を養う大切な機会となっている。時代が変わっても、世界に向けてリーダーシップを持って行くために、英語は非常に有用な能力であり、その意味で、当校の取り組みが参加された先生方の何かの役に立てたら嬉しい。実り豊かな研修会となることを祈念している。」



山崎吉朗・当研究所主任研究員



星野晴夫・広島女学院中学高等学校長

研究授業

中学1年、3年、高校1年、2年の計4つのクラスにおける5時間目の英語の授業を見学した。いずれのクラスでも生徒が主体となり、いきいきとスピーキングやライティング等のアウトプット活動が行われており、参加者からは「生徒が能動的に授業に臨んでいる姿勢に感銘を受けた」「生徒のアクティブな様子が大変印象的だった」等の感想が数多く寄せられた。



実践発表

『広島女学院中学高等学校 英語教育におけるアウトプット活動』と題し発表が行われた。はじめに野中理恵・広島女学院中学高等学校教諭より、同校の沿革、進路実績、英語の授業およびアウトプット活動について紹介され、続いて研究授業を行った4名の先生方から授業について解説された。

①『広島女学院中学高等学校 英語教育におけるアウトプット活動』

当校は1886年に砂本貞吉牧師が「広島女学会」を創設し、聖書と英語の授業を中心とした授業を行っていた。翌年初代校長としてN.B.ゲンス宣教師が就任され、当初から宣教師の先生方によるEnglish Onlyの授業を実践していた。現在では幼稚園から大学院まで擁しており、中高の生徒数は約1400人である。2014年より、SGHの指定を受けている。英語教育に力を入れている学校ということで文系の生徒が多く在籍している印象があるかもしれないが、文系理系の比は6：4で、国公立大学志望者に関しては概ね5：5の割合になる年度もあり、バランス良く、様々な得意分野をもつ生徒が学んでいる。



中学2年から高校2年にかけて、海外研修の機会が複数回あり、そのうち協定校であるアメリカのマウントユニオン大学へは、卒業後に進学している生徒もいる。

授業については、中学では、日本人の教師による授業5単位とネイティブスピーカーの教師による授業1単位とする「通常クラス」、日本人教師による授業3単位とネイティブスピーカーの教師による授業3単位とする「英語特別（通称α）クラス」がある。英語特別クラスは、2015年度より始まり、入学時に実用英語検定準2級以上を取得している生徒を対象としている。中学卒業時に同検定準1級合格を目指して取り組んでおり、既に1級に合格している生徒も3名いる。高校では、2年次より習熟度別クラスとなり、コミュニ

ケーション英語、英語表現が必修で、ネイティブスピーカーによる英会話については、中1～高1が必修、高2、高3が選択（高3は更に英語会話とAP Englishどちらか選択）となる。

アウトプット活動は、日頃の授業に加え、スピーキングテストやエッセイコンテスト（高2のみ）などのイベントを設けている。本日この後開催するスピーチ・プレゼンテーションコンテストは今年で40回目を迎え、年間を通して常に生徒たちが英語で活動できる機会を維持している。

②研究授業者による授業の解説

○常本奨悟教諭 担当：高2コミュニケーション英語II

・高2より習熟度別クラス制としており、習熟度の低いクラスほど更に少人数化してきめ細やかな対応を図っている。

・教材はBreaking News English等のウェブサイトより、世界のニュース、特に目の前の事象から背景にある社会問題について考察できるようなトピックスを選んでおり、その上でトピックスに登場する語彙や表現を身につけることをねらいとしている。

・グループワークは個人の活動量が減少するため、現在はペアワークと個人で行う活動を中心としている。

○前本日向子教諭 担当：高1英語表現Ⅰ

・ライティングとリーディングを中心に行い、授業では普段から音読に注力している。
・教材は文部科学省検定済教科書『UNICORN』（文英堂）、『Breakthrough』（美誠社）を使用し、その他にNHKラジオ「ラジオ英会話」の聴取を推奨している。

○高見知伸教諭 担当：中1英語

・音読をたくさん行うことで、耳から英語に慣れるよう指導している。
・教材は文部科学省検定済教科書『New Crown』（三省堂）を使用し、一年間で範囲を終えるよう指導している他、NHKラジオ「基礎英語」の聴取を推奨している。
・小テスト（前回授業の復習）は毎日、単語テストは隔週で実施している。
・学期に2回、スピーキングテストを実施。また、学期に4回、教員の前で個別に音読を確認する機会を設けている。
・ライティングは身の回りの人物や自分について紹介文が書けるように指導している。

○John Weil 教諭 担当：中3英語特別クラス

・入学時に実用英語技能検定試験準2級以上に合格している生徒たちを対象にしたクラスで、ロールプレイングゲームなどのアクティビティを取り入れることで、更なる会話スキルの向上に努めている。
・教師はなるべく質問への回答を避け、生徒同士が対話によって不明点や問題点を解決に導くよう促している。



スピーチ・プレゼンテーションコンテスト

中学校地のゲーンズ記念ホールにて、高1・高2の生徒によるスピーチ・プレゼンテーションコンテストが行われた。終始賑やかで活気溢れる雰囲気の中、各学年5名の発表者とタイ出身の留学生1名により、表現力豊かに伸び伸びと発表が行われた。



意見交換会

開会時に参加者へ配付し、スピーチ・プレゼンテーションコンテスト終了後に回収した「質問用紙」に基づいて意見交換会が行われた。限られた時間の中でも数多くの質問が寄せられ、参加者の熱意と関心の高さが窺われた。

本研修会の意見交換会は、個別に受けた質問事項に対して、広島女学院中学高等学校の英語科の先生方の回答を全体で共有する形式とした。以下の様な質疑応答が展開された。

Q. 学力差の大きなクラスにおいて、注意していることは？

A. 中学では、苦手意識のある生徒を対象に放課後に勉強会を開き、弱点克服と学習内容の定着を図っている。高校では2年次より習熟度別にクラスを分けているが、下位クラスの生徒も国立大学に多数合格しており、基礎を重点的に指導することで、しっかりと定着が図られていると感じる。

Q. 生徒のやる気の起こし方は？

A. 高校では e-learning を導入し、ゲーム感覚で英語に取り組めるような工夫をしている。中学では各学期にスピーチや CM 作成などグループ活動を取り入れており、授業から離れて「自分たちで好きな様にしてい」という時間を設けている。

Q. 習熟度別クラスのデメリットや弊害は？

A. 習熟度別クラスは1年間変動はないため、下位クラスに割り振られた時点でモチベーションが下がってしまう生徒がいることはデメリットと言わざるを得ない。また習熟度別にクラス編成をしてもその中で実力差は生じるので、最終的には個人を見ていくことになるが、理想としては全体で一定の学力に到達することである。

Q. 中高の連携が非常に上手くいっている印象を受けたが、具体的に行っていることは？

週に1度英語科の「教科会」が行われており、その場で必要な情報の共有や話し合いを行っている他、教員が中高どちらも教えているので、無理なく連携が取れている。何か新しいことを行う時は必ず教科会で話し合うため、各学年のシラバスは毎年英語科の全教員で理解したうえで指導を行っている。



講演

馬場哲生・東京学芸大学外国語・外国文化研究講座英語科教育学分野教授，国際教育センター長より「英語教育改革の中で求められる授業改善の在り方」について講演があった。関係代名詞等、文法指導の授業を想定した具体的な実践例が明快な解説と共に数多く紹介され、参加者からは「早速授業に取り入れたい内容で、大変参考になり有り難かった」等の感想が寄せられた。

本日の講演は①理論と政策の背景、②文法指導、③英文和訳と和文英訳、④授業改善のための指導案チェック項目の4つのパートからなっているが、②と③を中心に話したい。

①理論と政策の背景

1.1. 第2言語習得研究から

第2言語の習得については、まず、十分なインプットがあれば自然に言語は身に付いていくという考え、アウトプットこそ重要であるという考え、さらに Interaction（理解）中心へと変遷を経てきたが、いずれも hypothesis（仮説）であって実証されたわけではない。いずれにしても、理解可能なインプットを十分にさせることは依然として重要である。

文法の言語習得における役割には、意味中心に学んでいくため正確さに難がある Monitor Model と、要所毎に形式を重視して学ぶ Focus on form の2つの流れがあるが、言語を使いながら学ぶ点は共通である。

文法の教え方には、inductive（実例から規則）、deductive（規則から実例に当てはめる）の2つがある。最近はやがて inductive なやり方が主流になっているが、どちらがよいかはまだはっきりしていない。子供は inductive なやり方が適し、大人 deductive なやり方が適している傾向はある。ただし教授対象や、教える項目によっても違ってくる。

今後の英文和訳、和文英訳の指導にもかかわることだが、次の指導要領は高校だけでなく、中学も英語で教えるのが基本となる。この対局が英文和訳、和文英訳であるが、実際は第2言語習得における母語の役割を十分考察した上のことではない。

そして、今後、それまでの問題点を解決するものとして、content-based の教授法、つまり意味のあるものを教えていくという方向が考えられている。CBLT と CLIL だが、違いはアメリカで主流なのは CBLT で、ヨーロッパで主流なのは CLIL。それぞれに種類があるのだが、中心となるのは言語と content を一緒に教えるべきと言う考えで、これをどの程度実施するかが問題であり、skill を身につけるには content に傾きすぎてもいけない。

1.2. 昨今の英語教育改革から

小学校の免許は1種類だけで、その取得のための教職課程では、それぞれの教科の教育法が2単位ずつあるだけである。教科に関する科目は1単位だけだが、英語はそれもない。2020年から5、6年生で教科として英語が導入される。小学校で英語の何をどうやって教えるかの検討が、今まで行われていない。その土台となるカリキュラムがコア・カリキュラムである。中学の英語にもコア・カリキュラムを導入することで中学の教員の英語指導力の強化が図れる。また、小学校の現職教員向けのコア・カリキュラムも必要である。

小学校の英語授業はこれからしばらく混乱期が続く。2022年に全面実施の学習指導要領は、高校では全面実施は高1だけだが、義務教育は一斉に実施される。大混乱が予想されるので、それを緩和する移行措置が考えられているが、完全なカリキュラムができるのは、来年度の小1からである。従って今後5年間は混乱期が続くと予想される。一番大変なのは中学の指導で、小学校での英語学習歴が異なる生徒が毎年入ってくることになる。

②文法指導

2.1. 慣習的な指導法の問題点とその改善：関係代名詞を例に

2.1.1 伝統的指導法：2文結合

慣習的な文法の指導の問題点の例として、関係代名詞の2文結合を取り上げたい。

(例)

a) Natsume Soseki was a novelist. He wrote *Botchan*.

→ Natsume Soseki was the novelist **who** wrote *Botchan*.

b) The novelist is Natsume Soseki. He wrote *Botchan*.

→ The novelist **who** wrote *Botchan* was Natsume Soseki.



2.1.2 問題点

この2文結合のやり方は、中学の参考書にも、一般的『Forest』のような文法書にもないが、実際は多く指導されている。

しかしこの2文結合は、実際の発話プロセスとは異なる。関係代名詞を用いた文を生成するのに、まず2文を思い浮かべて、結合するわけではない。これは以下の問題がある。

まず、「前に立っている人がいる」→「それは父」というのが実際の英文の流れだがその流れに沿っていない。

発話の際に英文を2つ思い浮かべているわけではなく、また、名詞+who…が名詞節のかたまりで、そのかたまりの前後の切れ目を分らせるのが大事なのだが、そのかたまりがわからない。また、

a) Mike has a car. It was made in Germany.

の2文を結合して、

b) Mike has a car which was made in Germany.

とした場合で、a)は、マイクは車を一台持っていて、それがドイツ製ということだが、b)は、「ドイツ製の車を一台もっている。」となり、他の車を所有している可能性が商事、意味の違いができる。2文結合はうまくいかないことが多いのは、関係代名詞を使った文が先にあり、それを逆算して分解した2文を使っていることが多いためである。

また、以下の例では関係詞を使った2種類の文が考えられる。

The girl loves you. + The girl hates me.

→ The girl who hates me loves you.

→ The girl who loves you hates me.

You love the girl. + I hate the girl.

→ You love the girl (that) I hate.

→ I hate the girl (that) you love.

The girl loves you. + I hate the girl.

→ The girl (that) I hate loves you.

→ I hate the girl who loves you.

また、共通要素が固有名詞の場合

Taro loves Hanako. + Taro hates Keiko.

→ Taro, who hates Keiko, loves Hanako.

→ Taro, who loves Hanako, hates Keiko.

と、2文が可能になる。また、非制限用法を用いることになるが、中学校では非制限用法は使えない。

また、共通要素が人称代名詞の場合、2文結合すると非制限用法としても不自然になる。

I like Hanako. + I hate Keiko.

→ I, who hate Keiko, like Hanako.

→ I, who like Hanako, hate Keiko.

なお、SVCで主語に固有名詞を用いている場合、

Murakami Haruki is a novelist. + He wrote 1Q84.

→ Murakami Haruki, who is a novelist, wrote 1Q84.

と非制限用法を用いるか、そうでなければ

→ Murakami Haruki is **the** novelist who wrote 1Q84.

であるが、冠詞をなぜaからtheにしたか、説明しなければわからないという問題が残る。

このように、関係詞の2文結合は、さまざまな条件を満たす場合にしかうまくいかない。非制限用法

ならばうまくいく場合は多いが、制限用法はとくにうまくいかない場合が多い。

2.1.3 より良い指導例 その1 言語を使いながら身に付ける

では、良い指導例はどのようなものか。まず、題材に生徒にとってリアリティのあるものを扱うことが大切である。例えば、作家と作品を結びつけるような練習を行う。

まず作家の写真を見せて、I show you some pictures. Do you know the names of those novelists? (No.1~No. 5、写真の下に名前と問いかけ、Who is No.1? Who is No.2? と確認する。(One is Kawabata Yasunari. One is Murakami Haruki. など)

さらに、各作家の作品を示し、関係詞を用いた名詞節を作る。

the writer who wrote *Norwegian Wood*

the writer who wrote *The Snow Country*

the writer who wrote *The old man and the Sea*

制限用法の本質はこのような名詞節を形成することで、これを理解させるのが重要である。

他にも「画家」「音楽家」「俳優と作品」など色々なパターンで可能となる。

また、名詞の定義からどのような名詞かを当てるような練習も可能だが、英英辞典の定義はそのままでは難しいことが多い。

pilot ならば、the one who operates (control) an airplane などは operate, control などが難しい。simplify (平易に) しておく必要がある。

また、挙げた例から、自分が結婚したいタイプ3つを選ばせ、文を書かせ、さらにペアで言わせるような練習も考えられる。

(文例)

is good-looking.

is kind.

I want to marry a person who works for a big company.

has a sense of humor.

likes children.

can cook very well.

(3つ選び、文を書かせる。)

- I want to marry a person who has a sense of humor.
- I want to marry a person who likes children.
- I want to marry a person who can cook very well.

(相互に言わせる。)

A: What's your type?

B: I want to marry a person who....

このような活動をどんどんやっていると、2文結合をしなくても関係代名詞を使った文ができる。

2.1.4. よりよい指導例 明示的な文法指導で

関係詞に関して、明示的な指導をする際には、以下に留意するのが重要である。

関係詞は後置修飾で、日本語は前置修飾だが、この理解は生徒にとって意外と難しいものである。「私が昨日読んだ本」を英語にする場合、I...と言ってしまった時点で次が続かない。

また、the boy who ate two hamburgers を、The boy ate two hamburgers. と、文として受け取ってしまう場合が多い。the boy who ate two hamburgers が名詞節であり、文ではないことを理解させることがポイントである。

2.2 文法指導のアプローチ

文法指導の際に重要なのは、授業を生徒の現実に即したコミュニケーションとすることである。ポイントは①生徒にとって現実味の感じられるトピック・例文、②現実的な場面・文脈の設定、③生徒の注意を意味・メッセージに集中させる、④インフォメーションギャップ、⑤意思決定、⑥問題解決であるが、まず①②を可能な範囲で行い、③④を適宜取り入れ、⑤⑥は別立てのコミュニケーション活動とした方がやりやすいと思われる。

ただ、できるだけ communicative にといっても、例えば現在完了なら現在完了に関して、メカニカルなドリルを行って形式に慣れることは必要である。

また、はっきりと説明をする明示的な文法指導も間接的に役に立つものである。そして、単語熟語、基本表現を暗記することも重要である。

2.3. 文法指導の手順

指導には、

- 1) 特定の例から一般原則へ向かう帰納的(inductive)な指導と、
- 2) 一般原則から特定例へ向かう演繹的(deductive)な指導があるが、

最初の段階では抽象的な例は分かりにくいので、できるだけ deductive な方向が望ましく、できるだけ実際の生活に即した例をあげてやることである。

時制で言えば、will と過去の対比は分かりやすいが、現在完了は既習事項との対比は難しい。それならばできるだけ多くのインプットを行い、音声も併用するのが望ましい。

また、例えば三単現の-s にしても、「自分と相手以外が主語の自動詞に s をつける」といった、生徒がルールを発見する発見学習の形にしてやるのがよい。

2.4. 重点的に押さえておきたい文法指導

a) SOV 言語から SVO 言語への変換。

「私はこの間の日曜日デイズニーランドへ行った。」といった SOV の日本語の文を、

→ 私 / 行った / デイズニーランド / 家族と / この間の日曜日。

と、SVO の英語の構造へ変換できるようにしてやる。中学レベルでこれができるようになるとよい。

また、主語の問題も重要である。日本語の助詞「は」の機能は topic 提示であって、主語ではない。

「明日は英語のテストだ。」を Tomorrow is English test. とやってしまう。I を主語にして、「私は英語のテストを受ける。」と発想できるようにならないといけない。

「象は鼻が長い。」といった二重主語の問題もある。「象は長い鼻を持っている。」と発想できないと英語にならない。「この小説は夏目漱石が書いた。」を、「夏目漱石がこの小説を書いた。」とできるようにするのは、やはりトレーニングが必要である。川端康成の雪国の冒頭「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった。」をサイデンステッカーは"The train came out of the long tunnel of the snow country." と訳した。英語の発想ではこうなるが、これでは、今でも新幹線が関東を抜けると急に雪が降ってはっとするあの感覚は出ず、あたかも実況中継のようであるが、サイデンステッカーは指摘されても訳を変えなかった。

また、a book on the desk のような、名詞+前置詞句・分詞句・接触節・関係詞節などの後置修飾も理解が難しい。

そして、品詞の概念を理解するのも大切である。名詞のかたまりのとらえ方、また、形容詞、副詞の機能もよくわかっていない。例えば dry が形容詞であり、動詞でもあるように、同じ単語が違う品詞として使われるのは、英語の便利さであるが、不便な面もあると言える。その単語の前後の並びから判断せねばならない。英語は文の展開がわからないと理解が難しい言語である。pattern practice のようなものは廃れてきたが、単純な変化は question and answer でどんどん練習することが有効であり、もっと光を当ててよい部分だと思う。さらに英語の動詞の相を理解するのも重要であるが、新学習指導要領では、中学で仮定法過去、現在完了の進行形が入ってくる。大変ではあるが、中学授業の際に、本当

は現在完了進行形のはずの have been living も現在完了で代行していたようなことはしなくてよい。また、if 節もこれは仮定法ではないかと思われるものが教科書にはあったが、それも仮定法を使って指導できる。体系として時制全体を説明するのは、実は混乱の原因である。テキストに適宜出てきて慣れていくことによって生徒は文法が身に付く。

③英文和訳と和文英訳

3.1.1 英文和訳の長所

英文和訳は批判されることが多いが、長所もある。生徒が文の構造を理解しているかどうか確認できるか確認できる、確実性の高い方法であり、一概に否定するべきではない。また、予習をちゃんとしてくる生徒にとっては、家庭学習が有効なトレーニングとなる。現在、ICT を用いての反転学習がよく言われるが、家庭での準備を前提とし、授業は予習での理解を確かめるという意味では、英文和訳は元祖反転授業といってもよい。

3.1.2 英文和訳の短所

また、英文和訳は英語の直読直解を妨げると言われているが、本当にそうか検証されている訳ではない。ただし、予習をしてこない生徒にとっては、授業は日本語訳を写すだけで、結局日本語の暗記の問題となる。（以前短大で教えていたときに、訳は完璧にできていたが、すべて一文ずつずれていた生徒がいた。）英文和訳は意味のあることにしても、それだけでは不十分であり、他のリーディング技能の訓練も必要である。そうしたことに割く時間を確保するには、英文理解を微調整し早く終わらせることである。金谷憲先生の『高校英語の授業マニュアル 訳読 Only からの take off』（アルク）はこのためのヒントが多く掲載されている。

「和訳先渡し」によって理解の負荷を軽くし、他の定着や産出の活動を増やすことも考えられる。これは推奨できる方法である。まず訳を配って読ませる。8時間かかったことが3、4時間に圧縮できる。一番指摘される問題は、自力で英文を読まなくなるのではということだが、意外とそうでもない。特に教科書に関してはそうである。教科書をこのような方法で早く終わらせ、他の英文を読むというやり方もある。

英文和訳以外には、Pre-reading、While-reading、Post-reading でそれぞれ様々な活動が考えられるが、和訳先渡しをしてしまってはできないものもあるので注意を要する。以下にいくつか英文和訳以外の活動を紹介する。

○題意把握読み

Phrase Reading をして予測、推測しながら読む。

人物の一部を隠した写真を示し、以下の順に発問する。

Is he Abe Shinzo? Barack Obama? Stevie Wonder?

What's his job?

What does he do?

He is a singer, music maker, plays musical instrument.

What does he play?

Where is he from? He is an American?

In a word, he is a musician.

Stevie Wonder is an American, but his ancestor was an African.

He is an African American musician.

これは中学校の教科書の第一文であるが、このように質問しながら理解させることも可能である。

○予測、推測しながらの phrase reading

power point を使って phrase を次々と出しては消し、出しては消しとやっていく。生徒は黙読で一文ずつ意味を考える。うまく行えばリスニング能力も伸びる可能性がある。リーディングは自分のペース

で読めるが、このやり方だと消えてしまう情報になるので、より集中を要するためである。

○上記以外の英文和訳以外の活動

教科書の登場人物を一人称で自分のこととして音読する。また、自分が主人公になったつもりで、質問に答えていくといったような、なりきり音読、なりきり Q&A などがある。また、誤りを含む英文を聞いてそれを訂正して読んでいく誤り訂正音読などがある。また、production 活動としては、内容の要約、内容に加筆、感想、意見、話の続きを考える等、いずれも writing にあたる活動がある。

3.3.1 和文英訳の長所

自由英作文は自分で言える範囲のことを英語で言う活動にとどまるが、和文英訳はまだ十分習得していない多様な単語、文法を使わなければならない場合もあり、それらの習得に役立つ。また、母語から外国語への変換は実際に外国語を使う場合必要な技能であり、それを磨く訓練になる。また、同一の問題を扱うので、解答が多様になる自由英作文より一斉授業では扱いやすい。

3.3.2 和文英訳の短所

翻訳は高度な技術であり、バイリンガルでもうまいとは限らないものである。また、日本語にとらわれた不自然な英語になる可能性があるが、それゆえに自然な英語を書く訓練に結びつけられる可能性がある。

3.4. 和文英訳以外のライティング指導

実際に書き出すまでによく planning をしてから取りかかる、process writing などがあるが、時間がかかるため毎回は無理にしても、試みる価値はある。

④授業改善のためのチェック項目

時間の都合上、項目を挙げるにとどまるが、明示的な説明は有効にせよ、それに頼りすぎず、生徒が英語を使う時間を最大限に広げることがポイントである。同じ意味で、日本語訳に頼りすぎないことも留意すべきだ。文字に頼りすぎず、音声も使うこと。書いたものをただ読むのではないスピーキングの指導も重要な留意点である。

ワークショップ・意見交換会

参加者は A グループと B グループに分かれ、「リーダー研修」平成 28 年度受講者による指導のもと、ワークショップが行われた。今回のテーマは「Grammar 1」「Grammar 2」

「Vocabulary」で、参加者からは「指導の視点を変えることによって授業をより良い内容に変えられるのではないかと実感できた」、「自分が学ぶ側になるからこそ気付けるたくさんのヒントがあって、早速来週からの授業に取り入れてみたいと思えた」等の感想が寄せられた。ワークショップ終了後、各グループで意見交換会が行われた。



ワークショップにおけるペアワーク・グループワークの様子（左：Aグループ、右：Bグループ）



ワークショップの指導員を交えて行われた意見交換会の様子

閉会式

全てのプログラムが終了し、山崎吉朗・当研究所主任研究員から総括があった。

山崎主任研究員は、「この二日間を通して先生方は色々なことを感じ取られたであろうと思う。昨日広島女学院中学高等学校で行われたスピーチ・プレゼンテーションコンテストでは、他国の言語を知り、他国の視点を持つことの重要性を訴えた発表が非常に示唆に富んでおり、印象的だった。英語を教えるということは教科指導に終始することではなく、自国とは異なる視点で物事を捉え、考える力を養うことであるという意識で、是非先生方には日々の指導にあたってほしいと思う。」と述べ、研修会を締め括った。



◆ 府県別参加者数 ◆

No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数
1	北海道	0	17	石川	0	33	岡山	0
2	青森	0	18	福井	0	34	広島	9
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	3
4	宮城	0	20	長野	0	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	0	37	香川	0
6	山形	0	22	静岡	0	38	愛媛	4
7	福島	0	23	愛知	2	39	高知	0
8	新潟	0	24	三重	0	40	福岡	4
9	茨城	0	25	滋賀	2	41	佐賀	0
10	栃木	0	26	京都	1	42	長崎	0
11	群馬	0	27	大阪	1	43	熊本	2
12	埼玉	0	28	兵庫	2	44	大分	1
13	千葉	0	29	奈良	0	45	宮崎	0
14	神奈川	0	30	和歌山	0	46	鹿児島	2
15	東京	0	31	鳥取	0	47	沖縄	1
16	富山	1	32	島根	1			
							計	36

全15府県

◆ アンケート結果 ◆ 回収率 86% (31名/36名)

○問1、当研修会への参加目的をお知らせください。

- ・最新の情報収集と自身の英語指導力向上のため。
- ・授業内でのアウトプット活動について学ぶため。
- ・4技能を効果的に指導していくための一助とするため。
- ・教育改革に向けた取り組みのヒントを得るため。

○問2、当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい。

●研究授業

- ・グループワークの授業がきっちりと成立していたことが大変素晴らしく感じた。
- ・どの授業においても生徒主体で行っており、非常に良かった。
- ・4技能を意識したスピード感のある授業展開は大いに参考になった。
- ・英語を学ぶだけでなく、英語を運用する総合力や社会問題に対する幅広い視野を養うことを目標とした授業になっていると感じた。

●実践発表

- ・カリキュラム編成や授業内容の実情を詳細に説明してもらえたことで、日本人教師とネイティブ教員の授業スタイルや使用教材、教科書まで知りたかった情報を入手でき、大変有難かった。
- ・昔から英語教育に定評のある学校らしい、積み重ねてこられた日々の実践が素晴らしいと感じた。
- ・英語科教員のコミュニケーションが非常に良く取れていると感じた。
- ・英語に関する行事が多いことが、生徒の英語学習に対するモチベーションを上げているように思った。

●質疑応答・意見交換会

- ・教科書を用いた授業以外に独自で先生方が行っている授業やスピーチ・プレゼンテーションコンテストについても話してもらえて良かった。
- ・教科書の全てのレッスンを行うのではなく、選択して行ったあと、ニュース記事等を使用していくことには驚いた。(中略)社会問題としても考えやすいものを厳選されており、教材を選ぶ観点の大切さを学んだ。
- ・4技能の習得と英語の運用力の向上に加え、生徒が楽しみながら積極的に英語を学べる授業展開のために貴重な意見が多かった。

●講演

- ・訳読や説明がメインの授業から脱却するためのポイントが様々に盛り込まれており、非常に参考になった。
- ・非常に専門性が高く、分かりやすい講演だった。学校に持ち帰り、これまでの教え方にこだわり過ぎず、工夫して授業をしたいと思う。
- ・従来の文法指導、英文和訳指導に変化を加え、すぐにでも授業に取り入れられる授業改善のヒントが得られ、大変参考になった。
- ・様々な指導理論の長所・短所を、実際的な指導内容に反映させて説明していただき、大変勉強になった。

●ワークショップ

- ・英語で授業を行うことは、生徒にできるだけ多く英語で発信してもらおうことで、教員はその

ための準備が大切なのだ」と改めて感じる事ができた。

- ・短い題材を何通りでも工夫していける楽しさを学び、日頃使用している教材に応用していきたい。

- ・楽しみながら英語を学ぶ授業展開にまだまだ工夫の余地があると考えさせられた。

- ・文法指導や語彙指導においても、方法次第では生徒の活動を増やすことが可能だということが分かった。

●意見交換会

- ・多くの先生方の意見を聞くことで教科指導の幅を広げ、モチベーションを上げる非常に良い機会となった。

- ・現場の状況を踏まえた上での体験談が色々と聞くことができ、有意義であった。

- ・得た情報を自分の考えだけでなく他の視点から考察することができて良かった。

- ・どのように指導方法を工夫すれば英語が苦手な生徒に対応できるか、といった現場に則した意見も話し合え、貴重な機会であった。

○問3、今後の本研修会への要望等をお書きください（例：研修会で取り上げてほしいテーマ、課題、実施してほしいプログラム、継続もしくは改善を望む事項）。併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書きください。

- ・英語授業におけるディープ・アクティブ・ラーニングの具体例とテストの問題例。

- ・実際の授業の動画や様子が伺える材料があればよいと思った。ワークショップで配られたハンドアウトが、どのように現場で使用されているか、またその反応等も見てみたい。

- ・生徒のレベルに応じた授業の進め方、各種検定についての研修会に参加してみたい。